

平成 21 年 6 月 24 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19890174

研究課題名（和文） 乳がん手術患者のボディイメージとその意味からみる回復の過程に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Recovery Process in Breast Cancer Patients after Surgery Using their Body Image and the Exploration of its Meaning

研究代表者

小林 万里子 (KOBAYASHI MARIKO)

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・講師

研究者番号：20433162

研究成果の概要：

本研究の目的は、乳がん手術患者がどのように回復していくのかを患者のボディイメージとその意味に注目し、明らかにすることである。40-50 歳代の女性 10 名に対して、術前から術後 12 ヶ月までに 5 回の面接を実施し、その内容を分析した。これまでの分析結果から考えると、乳がん手術患者のボディイメージとその意味から捉えた回復の過程は、『葛藤しながら、自分の身体と自分の価値を再構築する過程である』ことが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	670,000	0	670,000
2008年度	640,000	192,000	832,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,310,000	192,000	1,502,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：乳がん、手術、ボディイメージ、価値、回復

1. 研究開始当初の背景

わが国では、乳がんは近年、激増傾向で年に 4 万人が罹患し、1 万人の死亡がある。いくつかの他の部位のがんは罹患率および死亡率が減少傾向にある中で、乳がんはともに増加傾向を示している。好発年齢は 40 歳代で死亡率は 50 歳代がピークという女性が最も多く罹患するがんであり、家庭や社会での役割のある世代にとって脅威の疾患となっている。また、20～30 歳代や高齢者の罹患増加、がん生存者の高齢化などの問題が指摘されている(国民衛生の動向 2006)。これは、非婚傾向や高齢出産などのライフスタイル

の変化や動物性たんぱく質の摂取過多という食生活の欧米化が関係しているとし、ライフスタイルは短期間で大きく変化しないことから、今後しばらく、日本における乳がんは増え続けることが予測され、注目すべき疾患である。

乳がん患者の看護に関する研究は、がんの中でも多い分野である。先行研究では、がんの発見や診断、その後の治療や経過の中で常に心理的衝撃が存在していることを明らかにしている。また、女性性のシンボルである乳房の喪失と適応に関連して、ボディイメージを含めた心理的状況とその影響について

ても研究が多いが縦断的に追っているものは少ない。また、がんは身体に発生するが心理面や社会面にまで影響するため、QOL や自尊感情についての研究も多い。EORTC QLQ-BR23 と FACT-B は、乳がん特異的な QOL 質問紙であり、定量的研究の土台を提供するものとして多く用いられている。一方、痛みや浮腫など身体的な介入研究は少ない傾向である。最近では、入院期間の短縮や治療法の確立など乳がん手術患者を取りまく環境変化に伴い、術式の選択時の負担や外来化学療法や放射線治療に対する気持ちなどと共に、リンパマッサージ介入などの研究がみられている。

ボディイメージ研究をみると、藤崎 (1996) は自己の身体に対する思いであり、身体知覚、身体期待、身体評価から構成されることを提示した。また佐藤 (2004) は、意識的もしくは無意識的な自己の身体を通しての価値基準によって意味づけられて形成されると述べた。先に述べたように、乳がん患者のボディイメージ変容とその受容については重要であるが、ボディイメージの掴みづらさから、心理的状況や QOL、自尊感情などをその評価指標としてみているものが多い。実際、医学中央雑誌で 1983 年-2007 年の間の「乳がん」×「看護」×「ボディイメージ」は 27 件と少ない。心身相関の立場から、人の心と身体は切り離せるものではないというボディイメージの重要性を論じている。体育心理学では、身体やボディイメージと共に自己概念の関係について論じているものが多く、心身が表裏一体であるばかりでなく、自分自身への自信や価値を表出するものとして捉えられることを示唆している。このため、ボディイメージとその変化や意味を捉えることは、その人がどのような状況にあるのかをその人全体として捉え、どのような過程を辿っているのかを理解することができる。と考える。

乳がん手術患者は、否が応でも乳がんや乳房手術という状況に入らざるを得なくなるが家庭や仕事を持ち、生活を営み回復に向かって生活していく。乳がんや手術を契機として自己の身体に関心が向き、一気に身体を意識するようになる。本研究は、その時々のボディイメージに注目してみていくことで回復の過程を探るものである。

本研究では、乳がん手術患者のボディイメージは、「学習、記憶など経験や状況と密接に関連して、自己の価値と互いに関連し合っ形成され、流動的変化するもので身体なくしては知覚されないもの」であると定義する。

2. 研究の目的

がん告知、手術による乳房変形・喪失、その後の治療などさまざまな状況を体験して

いく乳がん手術患者がどのような回復の過程を辿るのかをボディイメージに焦点をあて明らかにし、回復を促進する看護ケアを検討することを目的とした。

その時々のボディイメージに注目し、その意味を丁寧につないでいくこと、ボディイメージと自己および乳房の関係を軸に乳がん手術患者が生きるという方向に向け、どのような回復という過程を辿るのかをみていくことが特色である。

回復の過程は、個別的な体験であり、それぞれが異なる。しかし、先行研究でも回復は生きていくという方向性を持っていることが明らかになっており、個々の違った軌跡ではあるが同じ方向を向くと考えられる。回復を促進する意味のある効果的な看護ケアを提供するためには、この乳がん患者の回復の過程はどのようなものであるのか、どのようなことが関係しているのか詳しく理解する必要がある。多くの乳がん患者の研究がある中で、乳がん手術前から術後 12 ヶ月までのボディイメージの変化を捉えた研究はなく、この分野での研究成果の産出が必要である。

また、対象数や追跡期間の限界はあるが、乳がん手術患者のボディイメージと意味やそれらの変化を明らかにすることは、患者を理解した上での看護実践を支え、直接的に看護の質向上に貢献する。乳がん手術患者の回復の過程の提示は、生じている現象の意味に見合った看護の方略の示唆となり、乳がん手術患者の回復促進プログラムの開発・展開の基礎的根拠となり得る。さらに、回復理論やその応用から生まれた癌回復の統合モデルの成熟に寄与すると考える。

3. 研究の方法

(1) 対象

以下の条件を満たす患者を対象とした。対象の選定には、研究施設の医師、看護責任者と相談の上、決定した。

- ①乳がんの診断で乳房温存術または乳房切除術を初めて受ける。
- ②成人期にある女性 (おおむね 22 歳-64 歳くらい) である。
- ③術後に重篤な合併症がない。
- ④術前、術後の放射線療法、化学療法、補充療法など他の治療の併用は規定しない。
- ⑤精神障害がない。
- ⑥日本語での言語的コミュニケーションが可能である。
- ⑦術前 (多くが術前日入院であり、外来時)、術後退院前 (または初回外来時)、術後約 3 ヶ月後、術後約 6 ヶ月後、術後 12 ヶ月後の計 5 回の面接が可能であり、そのことを含め、研究参加に同意が得られる。

(2) データ収集

- ①診療記録から、対象者特性（年齢、職業、術式、併用治療、配偶者の有無、子供の有無等）を調査した。
 - ②半構成的質問ガイドを用い、1回30分を目安に面接調査を行った。毎回の面接では、「今、現在の自分の身体に対する思いや考え」、「今、現在の乳房への思いや考え」をテーマとする。「自分にとって今、身体はどのようなものか」、「今、自分をどう思うか」は、会話の中で必要時追加した。また、対象者に「今、自分をどう思うか」を「前に比べてどうか」、「今までに比べてどうか」など過去を踏まえて質問をした。さらに、「今後、どのようなになりたいか、なっていくと思うか」など将来についても質問した。
- 初回面接では、「乳房のしこり発見、乳がん・手術の宣告時の思いや考え」、「乳房のしこり発見、乳がん・手術の宣告時の自己の身体に対する思いや考え」について追加した。

(3) 分析

回復は、生きるという方向性を持ち、過去、現在、未来を通してのプロセスとして捉えられるので、Bennerの解釈的現象学に基づき、質的帰納的に以下のように分析を行うこととする。

- ①面接内容は逐語録にしてデータとし、身体に関する意味内容に添ってラベルをつける。
- ②1対象の各時期の面接ごとに同じ意味内容のラベルをまとめ、コード化する。
- ③1対象の各時期の面接コードから類似性に基づき、集合体にしてカテゴリとする。
- ④対象ごとにカテゴリの関係性を構造化する。
- ⑤対象ごとのカテゴリの類似性に基づき、抽象度を上げて集合体のテーマを抽出、構造化する。
- ⑥意味内容や関係性、テーマの抽出にはデータ、ラベル、コード、カテゴリに繰り返し戻り熟考する。

(4) 信頼性・妥当性の確保

質的分析では質的研究の経験者、臨床で活躍する乳がん認定看護師、必要に応じて乳がん専門医からスーパーバイズを受け、信頼性・妥当性の確保に努め、分析を進めていく。

(5) 倫理的配慮

- ①研究の実施にあたっては、実施医療機関における倫理委員会の審査を受けた。
- ②具体的な倫理的配慮
対象者に対して口頭、文書にて研究の趣旨、拘束時間、面接内容の録音などについて十分に説明し、研究協力の同意を文書に

て得た。その際、研究協力は自由であること、一旦協力しても途中で中止できること、研究協力をしなくてもなんら医療に関わらないことを明確に伝えた。学会等で研究を公表することには了承をもらい、調査により得られた情報について、個人が特定されないようプライバシーを保護することを誓約した。いつでも問い合わせができるように連絡先を説明書に明記した。

乳がん手術前、術後間もない時期に面接があり、身体的、精神的に不安定な状況である可能性が高かった。対象者の安楽を第一として、必要に応じて、対象者家族に対して説明を行うこととした。また、入院期間中の面接では、病棟看護責任者と相談し、対象者にできる限り負担のないように配慮した。さらに、面接期間が12ヶ月に渡るため、途中辞退については、その都度、研究参加が可能かを確認してから面接に臨んだ。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

対象者は10名で、術後12ヶ月までの面接調査は全員が終了した。概要は以下の通りであった。(表1参照)

- ①年齢は40歳から57歳、平均年齢49.8歳。
- ②術式は乳房温存術9名、乳房切除術1名。
- ③術前化学療法施行者は5名。術後治療として化学療法施行1名、放射線療法施行7名、ホルモン療法施行8名（併用あり）。
- ④乳がんの発生部位の左右別では、右乳房が4名、左乳房が6名。
- ⑤配偶者の有無では、ありが8名、なしが2名であり、18歳未満の子供を持つ者は5名であった。

表1 対象者概要

対象	年齢 (歳代)	病期	術式	補助療法			
				術前 化学 療法	術後 化学 療法	放射 線 療法	ホル モン 療法
A	40	0	温存術	無	無	無	無
B	40	IIa	温存術	有	無	無	有
C	50	IIIa	温存術	有	無	有	有
D	40	I	温存術	無	無	有	有
E	50	I	温存術	無	無	有	有
F	40	IIIa	温存術	有	無	有	有
G	50	I	温存術	無	無	有	有
H	50	IIa	温存術	無	無	有	有
I	40	IIb	切除術	有	有	無	有
J	50	IIb	温存術	有	無	有	無

- ⑥職業の有無では、週3日以上のパートや非常勤を含めると5名が有職者であった。

(2) 面接の分析結果

適宜、逐語録を作成し、データからコード化・カテゴリ化を進めているが、全体としてのカテゴリの抽出や関係性、構造の解明に至るまでの分析は進んでいない。

これまで、成果として学会等で発表している部分について、以下にまとめる。

- ①対象者Iさんは40歳代の女性で、夫、長女、長男の4人暮らし。左乳がん（浸潤性乳管がん、T2N1M0、ステージⅡb）と診断され、術前化学療法を施行した。術前検討の結果、乳房切除術とすることをインフォームドコンセントされ、胸筋温存乳房切除術を施行した。

面接内容を分析した結果、術前では【乳房を残したい希望】、【乳房を切除した方が安全という現実】、【乳房を喪失してしまう自分に折り合いをつける】というカテゴリが抽出された。術後では【手術に伴う身体症状の出現】、【思うように挙がらない左腕】、【無意識にかばう身体のもどかしさ】、【できないことが増えた苦痛】、【思ったより冷静】、【自分の価値の縮小化】、【乳房を喪失した自分を模索する】が抽出された。このことは、術前は乳房温存の希望と安全な切除の現実の間で、乳房喪失の折り合いをつけようと葛藤し、術後は術前に思っていたより状況を冷静に考えられるとしながらも、身体症状や患側肢への気がかりやできないことが増えたことで、自分の価値を見い出せず、自分を模索している状況を示していた。

これらより、Iさんの回復過程は、『乳房を喪失した自分の身体と価値の再構築である』ことが示唆された。

- ②術前化学療法をせず乳房温存術を受けた対象者Aさん、Dさん、Eさん、Gさん、Hさんの面接を分析した結果、対象者の乳がん体験を捉える側面として、【身内・知人のがん体験】、【乳がんという実感】、【乳房への思い入れ】、【身体の異和感】、【生活への支障】、【退院後の生活】が抽出された。また、これらには「はっきりしない感じ」、「先が見えない」など【不確実感】が大きく関係していた。これらが要因となり、それぞれがさまざまに影響し合って、その時々ボディイメージを形成していくのではないかと考えられた。対象者は、受診、検査、診断・告知を経て、手術に至り、その後の治療や生活を慌ただしく送る中で、葛藤しながら乳がんであるという現実を受け止めていた。

これらより、術前化学療法をせず乳房温

存術を受けた乳がん患者の回復を捉えると、『がん告知や手術によって関心の高まった身体や気持ちに対して、今までと異なる自分であると感じており、新たな自分を見出し、不確実感を安定させようとする』ことではないかと示唆された。

- ③化学療法後の温存術を受けたBさん、Cさん、Fさん、Jさんの面接を分析し、ボディイメージとして、【告知により浮き出す乳房への思い入れ】、【抗がん剤副作用症状の受容】、【抗がん剤効果によるしこり縮小化の実感】、【乳房を温存できた実感】、【乳房手術に伴う身体の異和感】が抽出された。また、これらには、【選択した治療へのゆらぎと肯定】、【乳房温存の一時的な安堵と共存する不安】、【読めない今後への覚悟と落ち込み】といった気持ちの葛藤が影響していた。

身体と気持ちが複雑に絡み合い創りあげられるボディイメージからみると、これらの事例における回復過程は、『乳がんの告知、抗がん剤治療、手術といった体験を通じて、相反する気持ちに葛藤しながら、今の自分の身体と自己への自信を取り戻す過程である』ことが示唆された。

このように部分での分析は進んでおり、これまでの分析結果をつなげて考えてみると、乳がん手術患者の回復の過程は、『乳がん告知、手術やその他の治療を体験する中で、葛藤しながら、自分の身体と自分の価値を再構築する過程である』のではないかと示唆された。

現在も、信頼性・妥当性の確保に努めながら各面接内容の分析を進めている。また、テーマの抽出や関係性、構造を詳しく解明していくには、カテゴリ化を熟考していく必要がある。術前化学療法、術式、術後補助療法などの他、対象者背景も吟味し丁寧に分析、考察していく。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計3件）

- ①小林万里子、市川加代、中西陽子、二渡玉江、ボディイメージから捉えた化学療法後に温存術を受けた乳がん患者の回復過程、第23回日本がん看護学会学術集会、平成21年2月7日、沖縄コンベンションセンター
- ②市川加代、小林万里子、二渡玉江、乳房温存術を受けた初発乳がん患者の体験、第5回日本乳癌学会関東地方会、平成20年12月13日、大宮ソニックシティ

- ③小林万里子、市川加代、二渡玉江、術前化学療法後に乳房切除術となった症例からみる看護の方向性、第 39 回埼玉・群馬乳腺疾患研究会、平成 20 年 6 月 14 日、高崎ビューホテル

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 万里子 (KOBAYASHI MARIKO)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部・講師
研究者番号：20433162

(2) 研究分担者

(なし)

(3) 連携研究者

(なし)